

kubotatsu

look for the 21st century hero
and cross America on a motorcycle!

くぼたつアメリカ大陸横断録 ②

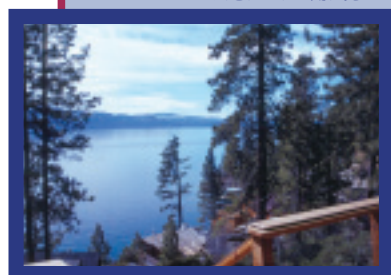


世紀のヒーローを求めて

「シリコンバレーのビジネス構造は日本とまったく違う。閉じてるに対して開放。あとになってじゃなくて先。規制するに対してこだわらない。まるでさかさま。この3つが大きな違いだね」

タホ湖のほとりでスーパーウーマンに出会った。彼女の名はエリス・フェット。建築家とエンジニアの肩書きを持って、自分で会社も経営してる。まずは、そのルックスにまいったよね。超美人!!

エリス宅からタホ湖が見える



「シリコンバレーは開放することで前に進む」 an open-door policy of Silicon Valley

僕の親戚の一郎（34歳独身、プログラマー、シリコンバレー在住）が今回の案内役。でも、まずはシリコンバレーの会社訪問じゃなくて仕事をしたかった。そしたら、なんと一郎のマンションがSOHOになった。プログラマーの彼は真夜中にRAVEの曲をかけながらキーボード打ってるって言うわけ。だから、「俺もやる！」とか言って、回線とPCを借りて仕事を始めた。最高に気分いいよね。部屋の中は原宿のオフィスと同じようなものだけど、外に出ればシリコンバレーなんだよ。

翌日、一郎がよく仕事をもらってる「バビロン」というソフト会社に連れて行ってくれた。バビロンに着いてまず驚いたのは、オフィスががらんとしていて、天井が高くてどの窓からも空が見える。それで、いろんな人がオフィスに出入りしてるんだけど、半数以上がバビロンの社員じゃなくて外部の人間なんだよ。みんなが勝手に自分の机を決めて、勝手にLANケーブル差して仕事やってる。中には「x x会社」のような札を勝手に立ててるやつもいるのに、誰も文句を言わない。パーティションも低いし、パネルもガラス張りだから中が全部見える。とにかく、何かを隠すという雰囲気がない。

一郎は4年前に脱サラして、タホ湖でアウトドアのインストラクター

をやった、それからプログラマーの仕事を始めただけで、その経緯がすごい。たまたまバビロンに友達がいかなにかで会社の中を歩いてたら、ある社員が「ねえ、君日本人でしょ。プログラムできる」って聞いてきた。「できるよ」って答えたら「じゃあこれやってみて」って言われていきなり仕事が始まった。それでなんかちょっとやって見せたら、「うん、いいね。半年契約ね。1千万でどう」、「いいよ」てな具合でね。

それから行ってみてわかったんだけど、シリコンバレーでは仕事の打ち合わせのやり方が日本とぜんぜん違う。日本は打ち合わせが1でチェックが9。向こうは打ち合わせが9でチェックが1。こっちのほうが効率いいに決まってる。これが最高だと思った。だから、シリコンバレーでは打ち合わせ相手はCEO。社長が直接打ち合わせに来てディレクションをする。「こういうことをやりたい。ポイントはこれとこれとこれ。じゃあよろしく」って感じでね。日本の場合は打ち合わせっていても「なんとなくよろしく」でしょ。つまり、日本の社長はどうあってほしいかをわかってない。向こうの最高責任者は何を頼みたいかが明快。そこが世界のリーダーシップをとっている人たちの精神なわけね。

もう一つは「誰がそこにいてもいい」という考え方。つまり、アウトソーシングなんだよ。彼らは会社を

開放することでそれを実現してる。何かをしたければ、歩いてるやつをつかまえばいいわけ。

シリコンバレーと日本とではビジネス構造がまったく違う。閉じてるに対して開放。あとになってじゃなくて先。規制するに対してこだわらない。まるでさかさま。ここがね、あきらかに見えた。

バビロンは、単語にカーソルを載せるとその訳語が出てくる便利な翻訳ソフトを作った会社。ソフトは無料配布してる。一郎の紹介で何人かと話したらいきなりプレストが始まった。それで、僕だったらこれを教育に使うとか、システムを大学に開放するのがいいとか、スターウォーズのシナリオをバビロンで読ませるようにするとかいいとか提案してみた。そうしたら、「それはおもしろい！」って盛り上がり、一緒にやるって話になった。

初めて会った人間とすぐにビジネスのプレストが始まって、具体的に話が進むということがすごい。ビジネス環境という意味で、人間が作り出した優れた空間がシリコンバレーなんだよ。

こういうのが日本にない。作ろうとしてもできないだろうな。それができない限りは、僕みたいに企画をやる人間、新しいことをやる人間はこっちにいるんじゃないかと、向こうに行っちゃえばいいんだというのがわかったね。



シリコンバレーでは朝6時に起床。スタンフォード大学のキャンパスを走った（上）バビロンのオフィスにて（下）

「タホ湖のほとりで21世紀の女性像を見た」 the 21st century woman on Lake Tahoe

趣味はアウトドアで、マウンテンバイクからトレッキングまでかっこよくこなすんだよ。あと、カメラの腕も抜群だった

ある日、俺たちが主催するパーティーに彼女を誘ったら、月明かりの中をカヌーに乗って現れたのね。もう、すげえって感じだった。

それから、エリースは飛行機の免許も持ってる。で、ついにないだサンフランシスコまで自分で飛行機を運転してって、向こうでフルマラ

ソンに出てまた帰ってきたっていうのよ。まさに強者。アメリカのトップレディーってこんな感じなんだなあって、あこがれちゃうよね。



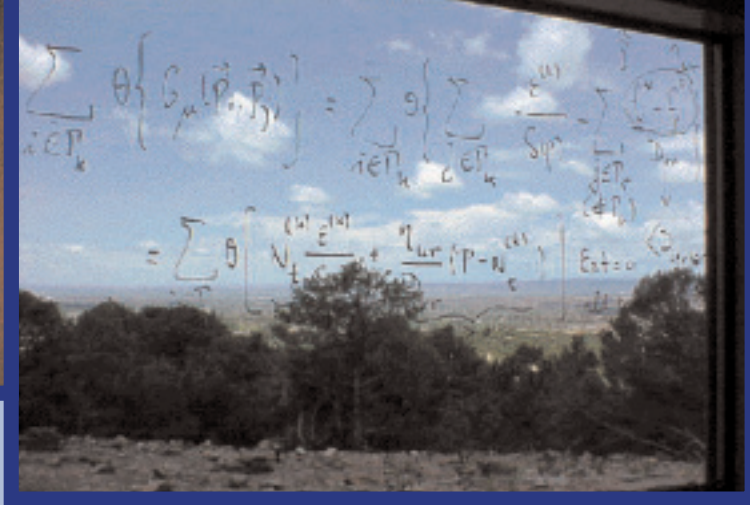
もちろん頭脳も明晰。いわゆる超インテリってやつだよ。おもしろいのはね、エリースはお父さんからずーっと勉強を教わってたって言う

のよ。でね、「学校ではなにをしたの」って聞いたら、「学校はコミュニケーションを覚えるところよ」って言うわけ。「いろんな人たちとどうつきあえばいいかを学校で学んだわ」ってね。ああ、これがアメリカのエリート像なんだってわかったような気がした。

エリース・フェットも間違いなくヒーローの1人だった。日本人として21世紀に目指すべき女性像という意味でね。



天才たちが窓や黒板に書き綴った方程式(上と右)



「天才たちの落書きが世界に君臨する」 graffiti of geniuses dominate the world

サンタフェはすごくいい街でさ、そこからちょっと離れた小高い丘の上に複雑系という学問の研究所がある。とてもセンスのいい11階建ての建物で、中は広いフロアがいっぱいつながってる。中はというと、ほとんどソファやベンチばかり。そこにみんなが集まってしょっちゅうプレストをやってる。個人の研究室を詰め込んだようなもんじゃなくて、みんなが集まって談話ができるスペースなんだよ。そこがすごい。

そこで、そこら中に黒板とか掲示板が立ってる。貼ってある紙を見ると、『戦争で右脳を撃ち抜かれた人が奇跡的に一命を取りとめて、左脳だけで生活している。クリエイティブな活動も行っている』そんな内容の新聞記事だったりする。複雑系ってのは哲学とか、次はどうかを予測する方法論とかを方程式で出しちゃう。そういう科学性にぴったりの新聞でしょ。

討論の内容もそれをどう思うかみたいな感じでね。それならって俺も参加させてもらったら、「空間の種類について」なんて話してる。空気のある空間とかない空間とか、

研究者の日課はソファでのプレスト



ブラックホールとかホワイトホールとか。俺は「気の空間がおもしろいって」話してみた。「エネルギーは空間がなくても存在してるから。ある意味では空間そのものでしょ」って言ったら「おもしろい」とか言われて。その中にインドの先生がいて、ウバニシャッド哲学の話をした。ウバニシャッド哲学から「ゼロ」が発見されたんだけど、そういうゼロの概念について話すんだ。「空間を存在させるにはゼロが必要だ」って。ゼロがないと絶対値を数字として表現できない。だからゼロが一番重要で、「ゼロは意志、空間は意志に従って広がる」なんて話をするわけ。「すげえ」って思った。

あきらかに奴ら天才だってわかるのは、それが立証されないと科学として認められないから、空間の話なんかをすべて方程式で書くんだよ。それも、サンタフェのきれいな町並みが見える窓ガラスにマジックで書いてっちゃう。でっかい窓にびっしり書いてある。短いじゃないよ。1行の方程式がもうびっしりと何メートルもつながって1つの方程式になっている。「天才なんだ、こいつら」って思ったよ、俺。

おもしろいのはね、フロアに置いてある黒板にみんなが考えてる理論を書いちゃうの。ほとんど方程式で書くんだよ、理論を。するとね、通りかかったやつが次々に違う筆圧でそれに書き加える。「ここは違う」、「この方程式の方がいい」みたいな感じでね。こんな研究室は見たことないよ、俺。普通ね、理論というのは隠すんだよ。絶対見せない。盗まれるから。でも、ここでは思いついたものはみんなが見られる。そ

の場で、その日、そのとき。それ見てまたなにか思いついたらすぐに書き込む。みんながみんなに。これはね、たった1人の天才の問題じゃないよね。天才たちが集まるネットワークの掲示板でしょ。オープンだよ。日本はクローズドで向こうはオープン。ナンバーじゃなくて、オンリーワンを狙ってる。ほかにないものを徹底的に出してくる。

大学院くらいの連中が30人くらいいたかな。歳は30代までだね。「教授は」って聞いたら「教授にはインターネット上でお会いするんですよ」って言う。

ソファには書籍が置いてあるんだけど、全部芸術の雑誌。写真集とか、ニューヨーク近代美術館においてあるような作品集とか。芸術なんだよ、学問が。研究所は明らかにクリエイティブな空間と位置づけているところがすごいね。

むかし東大の大学院によく行ってたんだけどね、完全に閉鎖すんだよ、自分たちの研究室を。誰も入れないように常に鍵をかけている。サンタフェには鍵なんか1個もないぜ。ドアがない。ガラ

ス張りだよ。シリコンバレーでも同じだった。この環境が先端を切るんだね。

「複雑系マーケティング」っていうのをニューヨークの株式市場に実践してみたら、あっという間に世界が一転しちゃった。ニューヨークの株式市場が世界に君臨し始めた。それを作った連中だからね。アメリカには、たった1人の天才じゃなくて、天才たちを集めることによってもっとすごいところまで極めるってことを、環境として提供できる度量があるんだね。

脱アメリカ、オンリーワンジャパン、よみがえった日本でもなんでもいいんだけど、21世紀になんかやるうとするなら、こんな環境を作り出せる流れが日本の中にできなければ絶対に無理だね。それにゼロモノの精神が加われば、無敵!

ナバホはインディアン居留地区。砂漠にたまに草が生えて枯れ草が飛んてるような、いわゆる西部劇の荒野。どこ見ても地平線ばかり。途中のガソリンスタンドでガソリン入れてタコスを食べ、スタンドのおやじに「ナバホはどこだ」って聞

いたら「あんなどこ行くやついない」って驚いてる。その意味は出発してすぐにはわかったよ。とんでもない日照りと風。竜巻に巻き込まれて吹っ飛ばされたりも

ナバホの少年は青く白く光る気を感じながら一と夕日を眺めていた





床屋風のいすに座ってキャニオンの絶景を眺める(上) 恐竜の足跡でインタビュー(下)

ソーラーマンの著書
Jump www.mrsolar.com



「“花に声をかける”とソーラーマンは言った」 “talk with your flowers”, he said

セント・ジョージの山奥に、岩がそそり立ったエアーズロックのような山がある。その山のてっぺんにソーラーマンが住んでいる。ガードレールも舗装もないきわめて危険な「道なき道」をとろとろと1時間半もかけて登って行った。

頂上に着いたらいきなり草原がふわっと広がって、そこにぼつんと大草原の小さな家があった。奥さんが出てきて、「お待ちしてましたよ」てな感じ。「だんなはもうすぐ散歩から帰ってくるよ」って言ってたら、ぼろぼろの車でどろどろどろっていきなり森の中から現れた。それがソーラーマン。

最初にソーラーシステムを見せるのかと思ったら、「散歩しよう」って言うんだよ。きれいな花を見ながら歩いていると恐竜の足跡があった。この部屋くらいの大きなやつがね。そこにみんなでお風呂のように入って、インタビューが始まった。なにを言うのかと思ったら「重要なことは静かに座っていること」だって。砂漠の中でじっとしていると、いろんなものが動き始めて「生命」がいるってのがわかる。そういうことを感じるのが大事だって。「じゃあ、21世紀はどうなるか」って聞いたら「世紀末だとか言うけど、

そんなのは昔から言われてきたこと。それよりも自分が今なにをしたいのかを自覚することが大切」ていうふうにあっさり言ってのけるんだよ。

散歩のあと家に連れて行ってくれて、ソーラーシステムを見せてくれた。「これはソーラーマガジンに載ってたのを取り寄せて組み立てただけなんだよ」だって。それにしても、なんでソーラーなのかって聞いたら「電気を引いてくれないからだ」って言う。彼は、決してソーラーがやりたくてこの上に来たんじやないんだよ。この上に来て電気を引いてくれないから雑誌を買って取り寄せただけなのね。インターネットだってケーブルがつながってなくて電話とFAXができないからやってるって言い方なんだよね。「その後を間違えちゃいけないよ」って彼は一生懸命言っていた。決して最先端技術とか、道具だとか、ネットワーク環境だとかが先じゃないってことをね。

テラスからはキャニオンの絶景が見える。彼は床屋風のいすにゆったりと足を投げ出して座ると「これは宝なんだよ。いいだろう」って言った。彼は物書きで「ABC's of LIFE」というのが何年かぶりにやっと売れたんだって。内容はきわめて簡単で「花に声をかけるとよく育つ」みたいなメッセージが1ページに1つずつあるだけ。

帰り際に彼が「お前はなに屋だ」って聞いた。「マスコミみたいなもんです」って答えたら、「じゃあ伝えておけ。なにが重要かってことをだ。それはお前の身近にある花に声をかけることだ」って。俺は「はい」って、それだけ。

夕日が見えてきてキャニオンがぱっと真っ赤になってさ、2人が大草原の小さな家の前で見送ってくれたんだけど、ふとうしろを見たら、もう仲良く肩を組んで家に入ってしまったよ。絵に描いたように。すごいなーと思った。

ソーラーパネル



した。もうのたれ死ぬかと思った。行けるとこまで行け!

やっとの思いで、ナバホのインディアン居留地区にあるインディアンセンターにたどり着いた。しばらくしたらおばさんがでてきて「あなたはこのなにしにきたの」って言う。「僕ら1万年前は一緒だったって話をしに来た」って答えた。「村の人たちと話ができるか」って聞いたら、案の定「みんな話はしない、英語を使いたくない」って言われた。ナバホは先住民族の意識が強く、アメリカはもともと我々のものだから白人はイギリスに帰れて今でも

言ってる。突然、西洋文明の人たちが入ってきて、政府を立てて、教育や言語や宗教を決めてしまう。それに対して反発すれば、武力で押さえつける。そういうくすぶりがナバホインディアンにはある。

でも「コミュニケーションをとりたいのなら、じっと座ってなさい」って教えてくれた。俺もそのことは知ってた。「おじいちゃんが禅をやってたから俺も“気”ってのがわかる。それで会話してみたい」って言ったら、日本のお坊さんとインディアンはよく話をするって新聞に書いてあったって言うのね。「へー」

って感じて。

センターを出てから1時間くらい行ったところで、日陰の小さな丘でじっとしてた。そしたら、どこからともなく少年が来て近くに座るんだよ。それで、ぼーっと見てる。夕日をね。俺と少年は気で対話できた。そしたら、彼の気が驚くほどピュアなんだよね。きわめて純粋。水にたとえるなら石清水のよう。大地の赤っぽい気と少年の青白い気が溶け合ってる。「1万年前は一緒にいたはずだ」って思いをやりとりしてたんだけど、だんだん友達みたいな気分になってきた。そのまま1時

間くらいじっとしてたら、そのうち「じゃあね」みたいな感じで帰っちゃたけど。

なによりもすごく気分がよかったな。アメリカに対してはコンプレックスがあった。だけど、あそこはもともと俺の先祖の土地じゃねえかって思いを少年との気のやりとりの中で感じ取れた。日本に帰国してからもその感覚は強く働いている。だから、強いアメリカ、我々の目指すアメリカ、ナンバーワンアメリカってな感じなんて今は全然ないよ、僕の中で。

「インディアンの少年は大地と溶け合った」 a young Indian and Mother Earth seemed to merge



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp